

トピックス

学会大会印象記

東京農業大学農学部 ^{まつ}松 ^{やま}山 ^{のぶ}宣 ^{あき}明 (社)日本植物防疫協会研究所 ^{たか}高 ^き木 ^{かず}一 ^お夫

I 平成 16 年度日本植物病理学会大会印象記

平成 16 年度の植物病理学会大会は 3 月 28 日(日)～30 日(火)の 3 日間、サクラ咲く福岡国際会議場(一昨年竣工)で開催された。会場ロビーからは蒙古襲来時の古戦場でもあった博多湾が一望でき、春霞の向こうには、かの「倭奴国王金印」で有名な志賀島が遠望できた。

今回の大会には約 900 名の会員が参加したと聞いているが、15 年ぶりの博多での学会ということもあってか例年に比べて参加者が多かった。初日の 28 日は、午前 9 時から平成 16 年度定期総会が開かれ、新旧学会長の挨拶、事務諸報告が行われ承認された。新学会長には明治大学の米山勝美教授が、副会長には名古屋大学の道家紀志教授が就任された。次いで学会賞、学術奨励賞、論文賞、日本農学進歩賞の授与式、永年会員推挙、貢献者の推挙が行われ、さらに新学会長記念講演、学会賞受賞者記念講演が行われた。

一般講演は、同日 13 時 30 分から五つの会場に分かれて行われた。総発表題数は 426 題で内容は多岐にわたっているが、とくに話題となったあるいは筆者が関心を持った講演を紹介したい。

IPM プロジェクト(独法人)が過去 5 年間行われてきたこと、あるいは「環境や食の安全」に関する消費者の関心の高まりもあって IPM に関連した研究が多かった。イネいもち病に関する研究では、コシヒカリの同質遺伝子系統の利用が報告された。この方法には、レース分布調査が不可欠である点でやや難があるが、すでにササニシキ同質遺伝子系統(ササロマン)での実績があり、将来性が見込まれる防除法と考えられる。また、ケイ酸の病害防除効果が再認識されており、ポリマー形態のケイ酸ナトリウムなどに関心が集まった。また、臭化メチル剤使用禁止後の対策として太陽熱、蒸気熱利用による防除、オゾン水や微酸性水などの機能水を利用した防除、硫黄粉剤のうどんこ病防除効果、ヨウ素の青枯病防除効果、無機銀系マットの養液栽培における利用など IPM の考えを反映した研究が増加傾向にある。とくに銀は高価ではあるが、その抗菌性が水銀や銅などよりも高いことは昔から良く知られており研究の発展が期待される。

耐性菌問題は撲滅型農薬廃止とともに生じた問題であり、病害抵抗性品種に対する新レース発生の問題にもよく似た難題である。最近佐賀県から報告されたメラニン合成阻害剤に対する耐性菌(MBI-D 剤耐性菌)の発生は、本剤

が今まで期待されてきた防除剤だけに今後の動静が懸念される。また、生物的防除剤に関する研究報告は、近年の化学農薬に対する様々な規制も関係して増加傾向にあるが、欧米諸国では拮抗微生物の人畜に対する日和見感染性が厳しく監視されるようになったとされており、防除資材の開発や利用に際してはその安全性に関する十分な情報収集が必要であろう。以上の他、菌類、細菌類、ウイルスなどによる国内外の新病害発生報告、病原菌の分類・同定・系統分類、病原体の簡易同定法開発、感染生理学に関連し多くの新発見や学際的研究チームによる高度な研究がみられた。また、諸企業の参画による新規機器を用いた見事な実験結果などが目立ってきており研究発展の期待も大きい。

福岡での本年度の大会は全体的にアットホームな雰囲気の中で行われた。九州という人情味のある土地柄がそうさせたのだろうか。本大会実行委員会委員長の高浪洋一氏(九州大学大学院)をはじめ、すべての関係者の労をねぎらい心から感謝の意を表したい。

II 第 48 回日本応用動物昆虫学会大会印象記

昆虫の多様性が色々な意味で注目を集めるこの時代に、第 48 回日本応用動物昆虫学会大会が 3 月 26 日(金)～28 日(日)京都工芸繊維大学で開催された。大会は 3 日間を通じて 1,000 人以上の関係者が参加し、発表者の精魂を込めた講演に聴き入った。スライド操作作業から解放され、自由な形式の表現法を駆使する発表は手書き模造紙を画鋏で止めていた昔を知る筆者にとって、時間の経過を実感させるものであった。今大会の初めての試みとして二人の海外研究者の招待講演が行われた。実感としては学会賞受賞者の熱のこもった記念講演に対してより深い感銘を受けた。一般発表内容については今年も激動の時代背景を受け、ある種の方向性ある変化が見られた。合成殺虫剤開発発表の激減、昆虫を扱う異分野の拡大、生物農薬を軸とする天敵研究の増加、昆虫の関与する生理活性物質への関心の高まり、昆虫体内共生生物への関心、生産現場での実践的研究の芽生え等に時代の流れが見られた。農業と周辺環境生物の相互関係というようなスケールの大きな発表が少なかったことは残念である。研究機関や大学の独立行政法人化が今後学会や研究内容にどんな影響を与えるのかは想像できない。しかし他の科学分野では時流に乗った研究費目当てのテーマの増加が憂慮されているに対して、応動昆虫大会では昆虫や害虫防除に対する純粋な興味や目標を基礎とした研究が大多数を占め、研究者が健在であることが肌で感じられた。運営に当たった京都地域の関係者の努力に敬意を表したい。

The Impression on 2004 Annual Meeting of Society. By Nobuaki MATSUYAMA and Kazuo TAKAGI

(キーワード: 日本植物病理学会, 日本応用動物昆虫学会)